

■ 生きるための言葉 ■

聴覚に障害のある澤田絢香さんは、7歳で左耳を、高校生になって右耳を手術した。手術の前日、母が「あなたは今まで障害のことで親を責めたことがないね。耳のせいにして諦めたこともないね。」と言ってくれた。涙が溢れた。みんなと同じ聞こえる耳は手に入れないが、努力で自分の進む道は変えられると知った。

苦しくて挫けそうになった時、辛くて心が折れそうな時、淋しくて心が震える時だからこそ、心に刺さって離れない言葉がある。朝日新聞が募集した「私の折々のことばコンテスト」には、全国の多くの中高生から宝物にしているそんな言葉が寄せられる。今年で4回目、これまでの入選作から拾ってみた。

成績不振に陥って気が滅入っていた藤川なぎささんに、親友が言った。「プラスはマイナスから書き始めるねんで」。今はこれでもいつか実を結ぶと前向きになれた。だが、労りの言葉だと思っていたそれは、叱咤激励の言葉でもあった。マイナスだと感じている時に、そこに一本線を加えてプラスに変えようとする努力ができるかが大切と考えるようになった。



いつか聞いた言葉が鮮明に蘇り、道標となることもある。幼い頃からピアノを習っている久保田舞香さんは、コンクールで本選に進んだ時、練習が辛くて自分で決めたノルマを軽くして練習した。本番では大勢に拍手をもらったが決勝には進めなかった。その後、決勝に進んだ友人の力強い演奏に心を動かされる。

その時、洋裁師の祖母の言葉を思い出した。「美しい服は、裏地も美しい」。美しい服と同じく、美しい演奏の裏には自分をごまかさずに取り組んだ努力がある。だから人の心を動かすと知り、手を抜いたことを恥じた。自分にしか分からない努力の証である綺麗な裏地を編んでいくと決意した。

滝下真央さんは、小学校の卒業式の日、学級会で先生に出された「最後の宿題」がいつも頭の片隅にある。「幸せになりなさい。それが最後の宿題です」。それ以来、宿題という言葉を書くたびにこのことを思い出し、幸せになるためには何をすべきか、自問自答が続いている。先生の与えた提出期限は生きている間。それを守りたいと思っている。

家族から、友人から、先生から——、人と人の間を美しくつなぐ宝石のような言葉たち。心を込めた言葉はいつか誰かを支えていく。思いが込められた言葉に誰もがいつの間にか支えられている。言葉の向こうに大切な人がいる。だから私たちは生きてゆける。